対話を始める

現場の先生のための
「進路指導」相談講座

— 第2回 —

取材・文／塚田智恵美
撮影／平野 愛

進路指導の場面で悩む場面、ふと立ち止まる瞬間があっても、立場上、なかなか率直に相談できる相手がいなくて、お困りの先生方も多いはずです。カウンセリングの領域では、カウンセラーが自身の担当する個別のケースについて、熟練した指導者と対話し、自身のカウンセリングの過程や問題点を振り返ることで、より良いカウンセリングのあり方を模索する手法があります※。この連載ではキャリア・カウンセリングの専門家である三川先生と現場の先生方の対話を通じて、現場の先生ご自身が「より良い進路指導のあり方」を考えていく様子をレポートします。

※「スーパービジョン」という手法。事例をもつカウンセラー（スーパーバイジー）と指導者（スーパーバイザー）で行う。

監修&アドバイス

追手門学院大学心理学部
教授
三川俊樹先生

追手門学院大学心理学部教授。カウンセリング心理学専攻。大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了（学術修士）。スーパーバイザーなどとして活躍。2023年5月まで日本キャリア・カウンセリング学会で理事・SV委員長を務めた。

CASE.2　私立の中高一貫校　クラス担任　増本先生（仮名）　50代前半

既に卒業している生徒なのですが、今も「もっと良いアドバイスができたのでは」と引きずっている生徒がいます。高3から担任として受け持つことになった、生徒Bさん。4月に面談すると、このように言いました。

高3の
生徒Bさん

やりたいことがないし、
勉強する意味もわかりません。

でも、とりあえず、大学には行きたいです。
親は「有名な大学に進学したほうがいい」と言うのですが…。

興味がある学部もない？… ひとまずあなたが得意な科目を生かして受験できそうな大学を、一緒に選ぼうか。

増本先生

何を聞いても「やりたいことはない」と答えた生徒。「今すぐ就職するほどの覚悟はないので大学には行きたい。行ったらなんとかなる気がする」と意志のなさそうな様子を前に、「この状態では、私のひと言が彼女の一生を左右してしまいそうだ」と悩みました。結局、得意な科目を伸ばして受験できる大学をいくつか紹介し、無事に進学したものの、あのとき、もっと良い指導ができたのではと考えてしまいます。

本人に意志がないのに
私が「誘導」していないか？

保護者は
生徒の学力レベルを
知らないのかも…

私のひと言が
生徒の将来を
左右してしまうかも

次ページではこのケースについて、三川先生と対話していただきました。

悩みの本質は？対話は意外な展開に。改善点ではなく、先生の信念が炙り出される

三川先生

「やりたいことはない」生徒への指導に悩まれた。でも先生は、生徒に「やりたいことを見つけなさい」とは言わなかったのですね。

増本先生

はい。大学で見つかることもあるはず。だからまずは進学に向けて現実的な選択肢を模索したのですが、それで良かったのか…。

できる限りのことをした。後悔はないのだけど…

増本「とりあえず進学はしたい」という意志はあったので、生徒の得意科目を生かした受験ができるようにサポートしました。でも私の言ったとおりに進学すると、それはそれで「私の言葉が、生徒の一生を左右してしまったのでは」と不安も湧いてきて…。もっと〝良いアドバイス〟ができたのではないでしょうか。

三川その生徒さんは、なぜ「やりたいことがない」と頑なだったのでしょうね？

増本何度か会話を重ねて私が感じたことですが、ひょっとしたら保護者が、彼女の成績などを知らないまま有名大学への進学を期待しすぎていたのかもしれません。

三川なるほど。親が高望みをしている状態で、生徒さんも自分自身の興味や関心に目が向いていなかったのかもしれない、と。ちなみに卒業後は、その生徒さんはどうされていますか？（気づき①◀）

増本卒業後…。そういえば半年ほど経って、本人に連絡したら「楽しい大学生活を送っています」と返ってきました。

三川生徒さんの得意科目を生かした受験プランを提案した。そのような関わり方をしたことに、先生は後悔があるのですか？

増本後悔はないです。ありきたりなことだけを言ってもしょうがない。なんとか自分の関われる範囲で最善を考えて提案しました。でも、大学に進学して別の興味を見つけたとしたら、それはそれで良い、と思っています。

気づき①

卒業後の生徒の様子がもっとわかれば、「これで良かった」「もっとこうすれば良かった」と判断する手がかりがあるのだろうな、と思いました。ただ、常に目の前の生徒で精一杯というのが現状。どのようにして自分の指導に対するフィードバックを得れば良いか…と考えました。

「やりたいことがない」が迷いの種ではなかった？

増本…話していたらほかの生徒の顔が浮かんできました。ほかにも「これで良かったのかな」と引きずっている生徒がいるのですが、話しても良いですか？（気づき②▼）「自分には学びたい学問がある」と明確な意志をもち、保護者もそれを応援していたのに、大学在学中に「やっぱり親の職業を継ぎたい」と大学を辞めた生徒がいたんです。

三川やりたいことが「ある」と安心していたのに、大学生活を通じて変わったと。

増本今、受け持っている1年生にも「自分は絶対に芸術系の仕事がしたい」と美大を志望している子がいて。実技など試験も大変だし、卒業後も厳しい世界であることを本人がどれだけわかっているか…。今後、現実に直面して考えが変わることもあるのだろうと思いつつ、今できる限りのサポートをしていきたいな、と覚悟してはいるのですが。

三川つまり増本先生は、やりたいことがない生徒だけでなく、やりたいことが明確にある生徒さんでも、常に「これで良かったのかな」「これから変わることもあるんだろうな」と思案しながら、向き合っていらっしゃるんですね。（気づき②▼）

増本そうですね。そうだと思います。

三川もし、また「やりたいことがない」生徒さんがいらっしゃったらどうしますか。

増本…うーん、やっぱり、その生徒の可能性はどこにあるかと考えて、選択肢を広げられるように、今はどこに注力して勉強すべきかを一緒に考えると思います。ひとまず大学に進学し、あと4年間、自分について考えるチャンスを獲得する。そのために、受験をがんばるというのも悪くないはずなので。

三川つまり増本先生は、自分が就く職業まで見通して大学に進学すべきだ、と考えていらっしゃるわけではないのですね。むしろ大学とは、自分の興味を知ったり、新しいものと出合ったりする「チャンス」だと捉えていらっしゃる。

増本はい。だから高校で答えを出さなくてもいいし、出せるものではないのかな。

気づき②

ほかの生徒について話すつもりはなかったのに、三川先生と対話しているうちにおのずと喋り出していました。「やりたいことが明確にある」生徒に対しても同じように悩んでいる、と指摘されて、「これで良かったのかな」と心配に思う生徒が、ほかにもたくさんいることに気づきました。

「やりたいこと」に真っ直ぐな生徒もこの先、変わっていいのでは？

「やりたいこと」が明確でなければ進学してはいけないのか？

一緒に悩むことが何よりのメッセージに

三川 先ほど増本先生に「後悔があるのか」と伺ったら、ないとおっしゃった。増本先生はやれるだけのことをやりきったからこそ、後悔という形では残っていないのですよね。

増本 そうですね。自分の言葉が生徒の人生を誘導してしまうのでは、と毎回悩みの連続ですが、だからといって何も言わずに見ているのは違うと考えています。

三川 お話を伺いながら、私は、増本先生が葛藤を抱えながらも真摯に生徒と向き合っていらっしゃるのが、素晴らしいと思いました。やりたいことがない生徒に対して不安を抱くのは当然のことです。でも、自分が不安だからといって「早くやりたいことを考えなさい」と生徒を急かすと、生徒の選択の幅を狭めることになりますよね。

増本 私もそう思うのですが…。ちなみに三川先生は「やりたいことがない」と語る、あの生徒のことをどうお考えになりますか。

三川 やりたいことはない、と言っているのは、学びたい分野や進学したい大学名が思い浮かばない、ということでしょう。大学には行きたいのだから「大学生活を過ごしてみたい」という意志はある。増本先生がお感じになったように、ご両親の影響が大きくて、まだ自分の興味に気づいていないのかもしれませんね。でも、大学に行けば何かが見つかるだろうと期待している。「学びたいこと」が明確でなければ、進学してはいけない、というわけではないはず。増本先生がおっしゃったとおり、途中で変わることもあるのですから。私に意見を求められなくても、増本先生が既にご自身で、答えをもっておられるように思われました。

増本 …今日、三川先生と対話しながら**「私の今のやり方でも、良いのかな」と少し思えてきました。**（気づき③▼）

三川 そうおっしゃっていただけて嬉しいです。指導した生徒さんに対して、先生はさまざまな心配を抱くもの。その都度、ご自身の関わり方を「これで良かったのだろうな」と振り返りながら、また次の生徒へと向き合っていくことが大切です。送り出した生徒の「その後」を知っておくことは、振り返りのヒントにはなるでしょう。でも、いくら知っても、それで本当に良かったのかはわからない。最後は「きっとあの生徒なら大丈夫だろう」と祈るような気持ちが、先生のこれからを支えていくのではないでしょうか。アドバイスするよりも、悩みながら生徒と一緒に考えることが、何よりの生徒さんへのメッセージになっているはずですよ。

気づき③

もっと良い指導、良いアドバイスがあったのでは、と悩んでいましたが、三川先生に問われて、今の自分の関わり方に問題があるわけではない、と自然と思えました。「マイナスな経験というものはない。すべてが今につながっている」と自分自身が考えていることにも気づきました。

三川先生との対話を終えて現場の先生が振り返る

対話を始める前は「やりたいことがない」生徒について、三川先生のお考えをお聞きしようと思っていたのですが、気づいたらほかの生徒たちのことまで話していました。たとえ「やりたいことがある」と明確に語った生徒であっても、それが直線的に職業に結びつくとは限らなかった。進路指導を行うということは、あらゆる場面で「あの指導で良かったのかな」と感じてしまうものだなと振り返りました。また、「あれで良かったのかな」とは思いつつも、生徒と深く関わらない、という選択肢は私にはないこと、悩みながらも「きっとあの生徒なら大丈夫」と信じる気持ちがあることにも気づきました。

50代を迎えて、人生にムダな経験などひとつもないのだと、心底感じられるようになってきました。進路選択も同じで、むしろ目的に向かって一直線であることよりも、目的のはっきりしない余白の時間をどのように過ごすのかが、人生を送るうえでは大切なのかなとも思います。これからも葛藤は尽きないのでしょうが、悩みながらも生徒と向き合っていきたいです。

＼ 三川先生からのメッセージ ／

「きっとこれで良かったんだ」と振り返ることも大切です

近年は総合型選抜など、入試の形が変化しています。志望理由書を書き上げるために、早く生徒に「やりたいこと」を見つけさせなければ、と先生方も焦る場面が多いのではないでしょうか。しかし、高校時点で無理やり「やりたいこと」を確定させるのではなく、悩みながらも「やりたいことがない」生徒を受け入れ、現実的な選択肢を模索する増本先生のお話からは、学ぶことが多かったです。「高校時点で人生は決まらない。この先、生徒が自分の力で人生を切り拓いていくだろう」といった生徒への信頼の気持ちが伝わってきました。それはきっと、普段から生徒と深い関わり合いをされてきたからでしょう。事例を振り返るとき、つい「もっと良い指導ができたのでは」「改善点を探そう」といった姿勢になりがちですが、できている点、良い点を言葉にし、問題がないことを確認しながら「きっとこれで良かったんだ」と自分自身を振り返ることも大切です。ぜひ、ご自身の良かったことも振り返ってみてください。それは悩み、ゆらぎながらも、生徒と向き合っていくことへの自信へとつながっていくはずです。

本連載で三川先生と対話してくださる先生を編集協力委員の中から募集しております。ぜひ、編集協力委員にご登録ください。詳細は66ページをご覧ください。